美術の時間です エコジャ

徳島県立近代美術館企画交流室長
森　芳功 の

美術をたのしむ、美術館をたのしむ

その91　秋の展覧会準備とイベント・サポーター

記念展の準備

二〇一五年の夏、徳島県立近代美術館は、開館二五周年のリニューアル工事により展示室を閉室し、クロス（壁紙）の張り替え作業を行っています。二五年も使っていると壁の色も変色し、年間数回の展示作業で釘穴も増えていますので、展示効果をそいでいました。それが一新されることになったのです。大地震にそなえて、ガラスケースに飛散防止フィルムを貼る作業も行っています。

次の展覧会、「開館25周年記念　フィギュア展　ヒトガタ・人形・海洋堂」と「開館25周年記念　人間表現を楽しむ25のとびら展」は、工事を終えた展示室で一〇月三日［土］からはじまります。

開館記念をうたった二つの展覧会を同時にオープンさせるため、今年は準備に追われる夏となりました。「フィギュア展」は、徳島県教育委員会と徳島新聞社がつくる文化の森25周年記念展実行委員会の主催（近代美術館の担当は、友井伸一・安達一樹上席学芸員）。春に行った展覧会「美の饗宴　西洋絵画の三〇〇年」と同じ開催形態です。「美の饗宴」展のときもそうでしたが、徳島新聞社、県立二世紀館、近代美術館の担当者が連絡をとりあって日々準備を進めています。近くでそのようすに接していると、忙しく活気あるようすが伝わってきます。

八月はポスターやチラシが納品されて広報が本格化しますし、プレ・ワークショップも開かれました。ガラスで小さなヒトガタをつくったり、ドールハウスや公園内を歩いて拾ったもので「がらくたアート」を制作したりしました。「フィギュア展」を知ってもらい、盛り上げようというイベントです。プレ・ワークショップ担当の安達学芸員は、展覧会の第一部「日本におけるヒトガタの造形小さきものへの愛」も分担。縄文時代の小さな土偶、江戸時代の根付や精緻な金工品など、各地の所蔵者との借用交渉や手続きに追われています。

第二部「造形集団　海洋堂のフィギュア」は、友井学芸員の担当です。お菓子のオマケ、食玩で知られている海洋堂は、特撮ヒーローや博物館モデル、美少女フィギュアなど多種多様な話題作を世に送り出しています。出品点数の面でも展覧会のメインとなるコーナーとなりますが、こちらも着々と準備が進められています。

「25のとびら展」

もう一つの開館25周年記念展、「人間表現を楽しむ25のとびら展」（担当：筆者、竹内利夫上席学芸員、亀井幸子係長）は、コレクションによる展覧会です。一般財団法人地域創造の助成を得ましたので、規模を広げて所蔵作品を紹介し、図録も作成します。

会場には、「誰？」、「家族」、「命の力」など、作品に親しむお奨めのヒント（「とびら」）を開館二五周年にちなみ二五設けます。それをヒントにしてお楽しみいただこうと思っています。

さまざまな人との協働により、多くの講座を開くのもこの展覧会の特徴です。実技と関わる催しや展示解説の他、シニア対象の演劇を取り入れたワークショップ、視覚障がいのある人と晴眼者がいっしょに楽しむワークショップなど合計一四の催しの他、協力者の方々と鑑賞プログラムなどをつくる協働プロジェクトもすすめます。それらは本誌「エコジャ」でも順次報告していきたいと思っています。

イベント・サポーターさん

八月二二日は、「25のとびら展」でお手伝いいただくイベント・サポーターさんの初会合があり、8人の方が集まってくださいました。

「イベント・サポーター」とは、可能なときに興味のある催しをお手伝いいただく徳島近美のボランティア制度です。「25のとびら展」でも、年齢や関心の異なる方の参加がありましたので、お一人おひとりの意見が面白く感じられました。

たとえば、ある男性は、展覧会を観るのは好きだが、展示解説など学芸員の説明は「聞かない」とのこと。実際そのようなお客さまの数は多いはずですが、学芸員があまり話をする機会がない人なのかもしれません。学芸員は、展示解説や講座の講師としてお客さまの前に立ち、反応がよかったかどうか、その都度反省し次に活かしていますが、その場にいない人の話は聞けないからです。

私も他の美術館で展覧会を観るとき、特別に関心があるテーマでなければ、展示解説の声がじゃまに感じることがありま

す。余談になりますが、近年、予算規模の大きな美術館では、展示解説の参加者にヘッドホーンを貸し出し、学芸員が大きな声を出さなくても解説できるよう配慮しているところがあるほどです。

それはともかく、そのサポーターの方は、自分の見方、ペースで楽しみたいとのことで、なるほどと感じました。職員がそのような生の声に接して、次のサービスや活動に活かしていけるのも、イベント・サポーターの会合のよさでもあります。

Tさんご夫妻のアドバイス

この日の会合は、ざっくばらんで楽しい会となりました。ある女性の方は、東京で美術館ボランティアの経験があり、徳島と比較したお話がありました。別の女性は韓国へ留学したとのことで、手話や多言語によるサービスが韓国の博物館で行われていることを教えてくれました。

全盲の女性Tさん夫妻からは、心に残るお話がありました。今年二月に開催した「アートでつながるユニバーサルミュージアム展」で作成した補助教材や、視覚障がい者が絵を描くための道具を前にして、意見を出し合っていると、Tさんは、ヒモで絵を描く道具に注目しました。摩擦で板にヒモをくっつける仕組みのものなのですが、触って絵が確認できるので、描く実感が得られたようでした。「写真に撮って年賀状にすることもできますね」という話に続けて、「生まれたときから全盲の人は、絵を描く体験をしたことがない」、「今日は絵を描くことができ、ああいうことがあるのを初めて知りました。今日は感動しました」と話してくれました。

さらにTさんご夫妻から、次のようなアドバイスをいただきました。「視覚障がい者は、説明を聞いてもなかなか絵がイメージできない。十人いれば十人とも絵に興味がわかないのではないか。見えないのだから富士山という名前は知っていても山のイメージは得られない。しかし、今日のように自分で描き、触って確認できるのなら納得できる。視覚障がい者を美術館に呼ぶのなら、まず絵を描く体験をしてから、観るようにしたらいい」というご意見でした。

お仲間で、一年に一回、いろんなところに見学旅行に行くそうですが、やはり体験型のものが喜ばれるそうで、「サファリパークに行って、ライオンやトラを見ても分からない。だから『美術館おためし体験会』のように、まず絵を描く楽しみを知り、美術館に行く気持ちを高めるのはどうでしょうか」という提案もありました。

すばらしいアドバイスだと思いました。保育所の子どもたちなど、これまで美術館になじみのなかった人への働きかけでも、「まず楽しい体験」という点を大事にしています。通じるところがあると感じました。

私にとって感動的だったのは、帰り際のことです。「おつかれさまでした」とみなさんを見送ったのですが、しばらくして、一度部屋を出たTさんがご主人に連れられるようにして戻ってきました。そして、「以前、日本画の解説をしてくれたときのことが今でも蘇ります。光がサーッと入ってくるところなど、あの絵のことは、森さんの名前といっしょになっています」といって、わざわざお礼を言いに来てくれたのです。Tさんの微笑んだ表情は、何ともいえない優しさがありました。「アートでつながるユニバーサルミュージアム展」のとき、絵の図柄を触擦図に触って確認してもらいながら、作品の説明をさせてもらったのです。

この日のTさんの表情は、私の記憶に刻まれていくように感じました。同時に、Tさんとの話は、形など目に見えるものの奥にあるものに気づくのが、鑑賞にとっていかに大事であるのかを思い返す機会となりました。

そのような刺激をもらい、また展覧会準備をすすめていこうと思う今日このごろです。

開館25周年記念　フィギュア展」チラシ

ヒモで描いた絵

9月の催し

■展示室は、改修工事等のため10月2日[金]まで閉室します。普及事業などは開催しています。

次の展覧会は、リニューアルオープン後の10月3日[土]から。

■開館25周年記念「人間表現を楽しむ25のとびら展」プレ・ワークショップ

・「人について考える―中辻悦子ドローイング・ワークショップ6日[日]、ギャラリー(一階)、講師：中辻悦子(美術家)、対象：一般(小学校3年生以下は保護者同伴)　ロール紙を贅沢に使って、一人ひとりの描き方で人間像を描いていきます。定員20名。

★本誌9月号の発行時に締切は終わっていますが、定員に空きがある場合もありますので、一度ご連絡下さい(TEL088-668-1088)。

■「こども鑑賞倶楽部」「休館日の巻」12日[土]14時～　小学生対象。お絵描きなど、いつものクラブとは違ったメニューを用意します。